

国語教育専攻用

国語

(90分 200点)

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② 解答にはHBまたはBの黒鉛筆（シャープペンシルはHBまたはBの芯であれば使用可）を使用しなさい。
- ③ **マーク式の解答用紙**には、マーク式で解答しなさい。氏名、受験番号、科目を記入する欄と受験番号、解答科目をマークする欄に必要事項を記入してから、解答を始めます。例えば、**マーク式10**と表示のある問いで③と解答する場合は、下の（例）のように**解答番号10の解答欄の③**にマークしなさい。
- ④ **記述式の解答用紙**には、記述式で解答しなさい。氏名、受験番号を記入する欄に必要事項を記入してから、解答を始めます。例えば、**記述式2**と表示のある問いで解答する場合は、**2**の枠内に解答を**記述**しなさい。**枠外にはみ出したものは無効**とします。
- ⑤ いずれの解答用紙にも、**必要以外**のことを記した場合、その用紙にある**すべての解答を無効**とします。
- ⑥ 試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高くあげて監督者に知らせなさい。

（例）

解答番号	解	答	欄
10	①	②	③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

※ 出題の都合により、本文の一部を改めた場合がある。

国

語

【一】 次の文章は『竹取物語』の一節で、かぐや姫から持参すれば求婚に応じるとされた「蓬萊ほうらいの玉の枝」を、車持の皇子が持参した場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

(注1) その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木どもたてり。金こがね、銀しろかね、瑠璃色るりいろの水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに照り輝く木ども立てり。その中に、この取りて持ちてまうで来たりしはいとわろかりしかども、**A** のたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり。

山はかぎりなくおもしろし。世にたとふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さらに**ア** 心もとなくて、船に乗りて、追風吹きて、四百余日になむ、まうで来にし。大願力にや。難波より、昨日なむ都にまうで来つる。さらに、潮に濡れたる衣だに脱ぎかへ **a** なでなむ、こちまうで来つる」とのたまへば、翁おきな、聞きて、うち嘆きてよめる、

B くれたけのよよのたけとり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し

これを、皇子みこ聞きて、「**イ** こころの日ごろ思ひわび **I** はべりつる心は、今日なむ落ちぬる」とのたまひて、返し、我が袂たもと今日かわければわびしさの千種ちぐさの数も忘れぬべしとのたまふ。

かかるほどに、男おとこども六人、つらねて、庭にいで来たり。

一人の男、文挟ふんばさみに文をはさみて、申す、「**注2** 内匠たくみづかさの工匠たくみ、あやべの内麻呂申さく、玉の木を作り **II** 仕うまつりしこと、五穀を断ちて、千余日に力を尽くしたること、すくなくからず。しかるに、禄みくいまだ賜たまはらず。これを賜ひて、わろき **注3** 家子けこに賜はせむ」といひて、ささげたり。たけとりの翁、この工匠らが申すことは何事ぞとたたぶきをり。 **C** 皇子は、我にもあらぬ気色けしきにて、肝消えぬたまへり。

これを、かぐや姫聞きて、「この奉たてまつる文を取れ」といひて、見れば、文に申しけるやう、

皇子の君、千日、いやしき工匠らと、もろともに、同じ所に隠れぬたまひて、かしこき玉の枝を作らせたまひて、官つかさも賜はむと仰せたまひき。これをこのごろ案ずるに、御使つかひとおはしますべきかぐや姫の要えうじたまふべきなりけりとうけたまはりて、この宮みやより賜はらむ。と申して、「賜はるべきなり」といふを、聞きて、かぐや姫、暮るるままに思ひわびつる心地、笑ひさかえて、翁を呼びとりていふやう、

D まこと蓬萊の木かそこそ思ひつれ。かくあさましきそらごとにてありければ、はや返したまへ」といへば、翁答ふ、「さだかに作ら **b** せたる物と聞きつれば、返さむこと、いとやすし」と、うなづきをり。

かぐや姫の心ゆき果てて、ありつる歌の返し、

E まことかと聞きて見つれば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける

といひて、玉の枝も返しつ。

たけとりの翁、さばかり語らひつるが、**ウ**さすがにおぼえて眠りをり。皇子は、立つもはした、ゐるもはしたにて、ゐたまへり。日の暮れぬれば、すべりいでたまひぬ。

(注) 1 その山——蓬萊山。中国の伝説で**渤海**の東にあるという五山の一つ。

2 内匠寮——宮中の造営・修理、器物・調度の制作・補修などを役目とする役所。

3 家子——その家に属する人。妻子・従者・使用人・弟子など。

問 1 「**a**な」「**b**せ」の助動詞の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号

は、**マーク式** **1** ～ **2**。

「**a**な」

1

① 打消

② 完了

③ 断定

④ 詠嘆

⑤ 比況

「**b**せ」

2

① 尊敬

② 推量

③ 使役

④ 過去

⑤ 断定

問 2 **□**で囲んだ敬語 **I・II** について、敬語の種類と敬意の対象の組み合わせとして正しいものをそれぞれ次の中から一つずつ選び

なさい。解答番号は、**マーク式** **3** ～ **4**。

I **はべり**

3

① 丁寧・かぐや姫

② 尊敬・たけとりの翁

③ 謙譲・皇子

④ 丁寧・たけとりの翁

⑤ 尊敬・皇子

II **仕うまつり**

4

① 謙譲・皇子

② 謙譲・かぐや姫

③ 丁寧・たけとりの翁

④ 尊敬・皇子

⑤ 丁寧・かぐや姫

問3

「ア心もとなくて」、「イここらの」、「ウさすがに」の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、マーク式 **5** ～ **7**。

「ア心もとなくて」

5

「イここらの」

6

「ウさすがに」

7

- ① はつきりせずに
② じれったくて
③ 不安で
④ たよりなくて
⑤ ぼんやりと

- ① 最近の
② たくさんの
③ 近辺の
④ いつもの
⑤ かつての

- ① 見かけによらず
② 見かけどおり
③ 案に違わず
④ そうは言ってもやはり
⑤ さっぱりとして

問4

「Aのたまひしに違はましかばと、この花を折りてまうで来たるなり」を現代語に訳しなさい。解答番号は、記述式 **1**。

問5

「Bくれたけのよよのたけとり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し」 「Eまことかと聞きて見つれば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける」の和歌に共通して使われている修辞技法を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、マーク式 **8**。

- ① 序詞 ② 枕詞 ③ 縁語 ④ 体言止め ⑤ 本歌取り

問6

「C皇子は、我にもあらぬ気色にて、肝消えゐたまへり」とあるが、ここにおける皇子の様子の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、マーク式 **9**。

- ① 皇子は玉の枝を作った職人の登場が気に入らず、金を支払うはめになったことに困惑している。
- ② 翁が職人の申し出を不審に思っていることに皇子は立腹し、職人の努力が無駄になると不安がっている。
- ③ 皇子は、玉の枝を作った職人が突然登場したことで、自らの嘘が露見することを恐れて、戸惑っている。
- ④ 皇子は蓬萊の玉の枝を苦勞して手に入れたことで有頂天になり、職人の申し出を不愉快に感じている。
- ⑤ 翁が首をかしげていることに皇子はいたたまれなくなり、かぐや姫の心が離れることを恐れている。

問 7

「D まこと蓬萊の木かところ思ひつれ。かくあさましきそらごとにてありければ、はや返したまへ」を現代語に訳しなさい。解答番号は、**記述式 2**。

問 8

本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式 10**。

- ① 皇子は、玉の枝を手に入れた後も、蓬萊の山はこの世にない美しさで去りがたく、帰りが遅くなってしまった。
- ② たけとりの翁は、皇子の玉の枝を手に入れるまでの苦勞話にとても感じ入り、自分と同じ苦勞をしたことをねぎらった。
- ③ 内匠寮の工匠のあやべの内麻呂は、玉の枝完成のお祝いの言葉を述べにたけとりの翁の屋敷に参上した。
- ④ 高齢のたけとりの翁は、玉の枝を手に入れる苦勞話や工匠たちの話を聞き、疲れて居眠りをしてしまった。
- ⑤ かぐや姫は、皇子の持参した玉の枝が作り物と分かり、皇子と結婚しなくてはならないという不安から解放された。

問 9

『竹取物語』と成立の年代・時期が最も近いものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式 11**。

- ① 大鏡 ② 源氏物語 ③ 伊勢物語 ④ 新古今和歌集 ⑤ 平家物語

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、冒頭の「大平」とは精神科医・大平健、「森」とは社会学者・森真一のこ
とである。

大平が特徴づけた「治療としての『やさしさ』から予防としての『やさしさ』へという変化」について、森は、つぎのようにコメント
している。

「治療的やさしさは、不本意にも相手を傷つけてしまったとき、その傷を癒やそうとすることが、やさしさでした。修復こそがやさしさ、
なのです。

一方の予防的やさしさは、傷つけることを回避することがやさしさです。ということは、修復は最初から考慮にいれられていないので
す。傷つけたら終わり、という感じです。そう考えると予防的やさしさは、やはりとてもきびしいルールなのです」（森真一『ほんとはこ
わい「やさしさ社会」ちくまプリマー新書）

【X】、人の気持ちを傷つけないというのは、人によって強弱の違いはあっても、「間柄の文化」（私は、アメリカのように自分
が思うことを思う存分主張すればよい、ある事柄を持ち出すか持ち出さないかは自分の意見を基準に判断すればよいとする文化を「自己
中心の文化」と呼んでいる。それに対して、日本のように、一方的な自己主張で人に嫌な思いをさせてはいけない、ある事柄を持ち出す
か持ち出さないかは相手の気持ちや立場を配慮して判断すべきであるとする文化を「間柄の文化」と呼んでいる。）を生きる日本人なら、
だれもが抱いている思いである。非常に繊細で、傷つくことをとても怖れる太宰治は、人の気持ちを傷つけることをも異常に怖れるよう
なところがあった。

太宰の妻、津島美知子は、犬が相手のエピソードを材料に、やさしさでなく仕返しを怖れる気持ちから親切にする、**A** 愛のもつエゴイ
ズムについて指摘している。

「それほど犬嫌いの彼がある日、後についてきた仔犬こいぬに『卵をやれ』という。愛情からではない。怖ろしくて、手なずけるための軟弱外
交なのである。人が他の人や動物に好意を示すのに、このような場合もあるのかと、私はげげんに思った。怖ろしいから与えるので、欲
しがっているのがわかつているのに、与えないと仕返しを怖ろしい。これは他への愛情ではない。エゴイズムである。彼のその後の人間
関係をみると、やはり『仔犬に卵』式のように思われる。がさて『愛』とはと、つきつめて考えると、太宰が極端なだけで、本質的には
みなそんなもののようにも思われてくる」（津島美知子『回想の太宰治』講談社文芸文庫）

仕返しを怖れるということでもなく、「傷つけるのが怖いから」という動機がやさしさの背後に隠されているのは、そう珍しいことではないのかもしれない。

太宰自身、つぎのようなエピソードでやさしさの描写をしている。

「難破して、わが身は怒濤どとうに巻き込まれ、海岸にたたきつけられ、必死にしがみついた所は、灯台の窓縁である。やれ、嬉うれしや、たすけを求めて叫ぼうとして、窓の内を見ると、今しも灯台守の夫婦とその幼き女兒とが、つましくも仕合せしあわせな夕食の最中である。ああ、いけねえ、と思った。おれの凄惨な一声で、この団欒だんらんが滅茶滅茶になるのだ、と思つたら喉まで出かかった『助けてー』の聲がほんの一瞬戸惑つた。ほんの一瞬である。たちまち、ざぶりと大波が押し寄せ、その内気な遭難者のからだを一呑ひとのみにして、沖遠く（注）拉らし去つた」
（太宰治「一つの約束」『太宰治全集10』ちくま文庫所収）

太宰は、このような遭難者は、世の中で一番やさしく、気高い人なのだという。一家団欒のようなほんの些細な幸せであっても、それを自分のために台無しにしたいくないと思う。自分の命が掛かっているときでさえ、そうした配慮ができる。

こうしたやさしさを尊いと感ずるのは、なにも今に始まったことではない。だが、傷つけてはいけないといった配慮が過剰になってきているところが、現代の特徴と言える。

森は、この新しいやさしさ、いわゆる「予防的やさしさ」に、けつして傷つけてはいけない、傷つけたら終わりという感じがあることに着目し、このような

「現代社会では、『やさしさ』や『やさしいこと』は、ほとんど無条件に『善いこと』とされています。しかし、じっさいに自分の生活をふりかえってみると、かならずしもそう言えないことがわかります。やさしさ社会がもたらししている『しんどさ』や『こわさ』に、あらためて気づくだろうと思います」（森真一 前掲書）

人を傷つけてはいけない。そのような意味でのやさしさにとらわれることで、うっかり注意することもできないなど、非常に厳しい社会になっている。そこに「やさしさ社会」の怖さがあるというのである。

やさしさが現代の日本社会では厳しいルールとなっているという森は、このような社会ではうっかり注意することもできないといって、つぎのような新聞の読者の投書をあげている。

「人にはうっかり注意も出来ない。反発を食らうからである。反発を恐れるため何も言えない。だから自分勝手な行動をするようになる」
（七十九歳男性）（毎日新聞二〇〇七年四月二十九日付朝刊）

「最近、他人を注意することをためらっている。誰もが常識的と思っているマナー違反を注意した時、反対にいらまされてしまったためである」(毎日新聞二〇〇二年四月十四日付朝刊)

具体的には、犬を放し飼いにしていたため、自転車に衝突しそうになって危なかったもので、飼い主に放し飼いを注意した。また、バスに乗っても携帯電話で話し続け、車内放送で注意されても知らん顔な乗客に、降りるときに注意した。

「だが、いずれもいらまされてしまい、情けない気持ちになった。(中略) そのうち注意したら殴られるなんてことになりかねないので、やはりためらってしまう」(森真一 前掲書、以下同書)

なぜそうなったのかと言えば、過度にやさしい人が増えたから、「やさしさ社会」になったからだと言っている。投書者は「やさしくない」人であり、やさしい人は「目の前にいるひとに注意して恥をかかせるようなことを避ける」のだという。

「注意されると、予防的やさしさという非公式ルールに従ってきたひとは、ムカついて、注意してきた相手をにらみつけたりします。なぜなら、彼らはマナー違反と思われることがあっても、対等性の原則を守るために、注意することを控えるからです」

「注意したひとにたいして暴力をふるうこともありえます。予防的やさしさのひとからすれば、注意するひとのほうがルール違反であり、マナー違反であり、『悪いこと』です。悪いことをしたひとを処罰することは、『善いこと』です。だから、注意するという『悪』をおこなったひとに、極端な場合は、暴力をふるうのです」

哲学者中島義道も、つぎのように言う。

「この国では『他人を傷つけず自分も傷つかない』ことこそ、あらゆる行為を支配する『公理』である。したがって、われわれ日本人は他人から注意されると、その注意の内容がたとえ正しいとしても、注意されたことそのことをはげしく嫌う。その他人は私を傷つけたからであり、『思いやり』を欠いたからであり、日本の行為論の『公理』に反する暴挙に出たからである。

こうした行為観のもとでは、注意することは大勇気を要し、注意されることは大屈辱である」(中島義道『へ対話』のない社会』PHP新書)

このような意味での「やさしさ社会」は、非常に生きづらい閉塞的な社会と言わざるを得ない。従来のやさしさが普及していた社会の方が、ずっと生きやすい社会だったのではないだろうか。

B 学校や職場で教育機能が発揮できないのも、予防としてのやさしさの感受性が広まったためと言える。予防としてのやさしさから治療としてのやさしさに、やさしさの感受性を戻していくことが必要なのではないだろうか。

C ここで、「やさしい」とはどういう意味なのか、辞書的な意味を確認しておきたい。

『広辞苑』(第六版 新村出編 岩波書店)によれば、「やさしい」には、つぎのような意味がある(「優しい」と書くもののみに絞り、「易しい」と書くものは除外する)。

- ① 身も瘦せるように感じる。恥ずかしい。
- ② 周囲や相手に気をつかって控え目である。つつましい。
- ③ さし向かうと恥ずかしくなるほど優美である。優美で風情がある。
- ④ おだやかである。すなおである。おとなしい。温順である。
- ⑤ 悪い影響を及ぼさない。
- ⑥ 情深い。情がこまやかである。
- ⑦ けなげである。殊勝である。神妙である。

また、『日本語源大辞典』(前田富祺監修 小学館)によれば、「やさしい」には、つぎのような意味がある(「優しい」と書くもののみに絞り、「易しい」と書くものは除外する)。

- ① 人の見る目に対して身も細る思いである。自分の行為や状態などにひけ目を感じる。みっともなくて恥ずかしい。
- ② 姿や言語、振る舞いなどに、こまやかな心づかいや、たしなみの深さなどが感じられるさま。

これらの辞書的な意味をみると、こまやかな心づかいがある、情が深いというような広く共有されている意味の他に、引け目を感じる、恥ずかしくなるといった意味も含まれることがわかる。

この前者の「こまやかな心づかいや情の深さ」が従来のやさしさに通じるものとすれば、後者の「引け目や恥ずかしさ」は傷つきやすさという意味での新たなやさしさに通じるものといえる。

「やさしい」には情が深いという意味があるわけだが、竹内は、この「情け深さ」という意味に着目し、「情け」の意味をたどっている。

『岩波古語辞典』(補訂版 大野晋他編 岩波書店)によれば、「なきけ(情け)」には、つぎのような意味がある。

「他人に見えるように心づかいをするかたち、また、他人から見える、思いやりある様子の意が原義。従って、表面的で嘘(うそ)を含む場合

もあり、血縁の人の間には使わない。ナサはナシ（作為する）と同根、ケは見た目・様子の意の接尾語ケに同じであろう」
具体的な語義としては、以下のようなものがあげられている。

- ①（うわべの）心づかいの様子。
- ② 見た目の風情。
- ③ 好意。
- ④ 思いやり。いたわり。
- ⑤ 情趣。
- ⑥ 物や人の微妙な風情を感じる心。
- ⑦ （漢語「情」の訓として）真情。感情。情愛。
- ⑧ 男女の情愛。
- ⑨ 義理。

竹内は、このような『岩波古語辞典』の語源説を踏まえて、国文学者の藤原克己が、「なさけ」の原義・本質として、作為性（為す）と外面性（ケ）の二要素が抽出されると指摘していることを紹介している。

Y、たとえば『源氏物語』では、光源氏について、それほど気持ちのないことでも「情け」のために口にするような人と描写していることを例としてあげ、つぎのように言う。

「その『情け』は、かならずしも『真情』などと言われるものではなく、その場その時における『他人への心づかい』である。

あるいは、嘘と言ってしまえば嘘であるようなことも、そこには当然ふくまれている。場をふまえ相手を慮おもんばって、そうしたことを『よく言ひつづけ』うることで、彼の『情け』であり、『文化』だったのである」（竹内整一『「やさしさ」と日本人——日本精神史入門』ちくま学芸文庫）。

そして竹内は、「情け」は、それがあまりに薄っぺらい場合はうわべだけのものになるが、好悪の感情をありのままに剥き出しにせず、心底深く思っている相手でなくても、感動させるような言葉や態度を作り出していける力は、やさしさでなくて何だろうという藤原の議論を紹介している。

こうしてみると、新しいやさしさのとらえ方のような、傷つけないという気の遣い方も、「偽物のやさしさ」だと切り捨てるわけにもい
かない。

(榎本博明『「やさしさ」過剰社会 人を傷つけてはいけぬのか』による)

(注) 拉し去った——連れ去った。

問 1

13 X、Y に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、マーク式 12

- | | |
|--------|--------|
| 13 X | 12 |
| ① さて | ② もちろん |
| ③ むしろ | ④ やはり |
| ⑤ あるいは | |
| 13 Y | 13 |
| ① もしくは | ② すると |
| ③ しかし | ④ そして |
| ⑤ だから | |

問 2

波線部 a c の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、マーク式 14 16

- | | |
|------------------|-------------------|
| 14 a 気高い | 14 |
| ① 容易に近寄りがたい | ② 品位を誇ろうとする |
| ③ 気分が高ぶっている | |
| ④ 負けん気が強い | ⑤ 尊く気品がある |
| 15 b 知らん顔 | 15 |
| ① マナーを知らないようなふり | ② 言葉を理解していないようなふり |
| ③ 放送を聞いていないようなふり | ④ 世間に関心がないようなふり |
| ⑤ 顔を見知っていないようなふり | |

「^c閉塞的な」

16

- ① 他との交流をもたない ② 人間関係が行き詰まった ③ 他の世代から浮き上がっている
④ 周囲の環境を切り離れた ⑤ 発展を望まない

問3 「^A愛のもつエゴイズム」とあるが、それはどういうことか。「相手」・「自分」の二語を用いて四〇字以内で説明しなさい。

解答番号は、記述式 3。

問4 「^B学校や職場で教育機能が発揮できないのも、予防としてのやさしさの感受性が広まったためと言える」とあるが、筆者が

そのように主張するのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、マーク式 17。

- ① うっかり注意をすると反発を受けてしまうような社会では、相手からの反発を恐れて誰も何も言えなくなるため、自分勝手な行動をする大人や子どもがたくさん増えて、人をにらみつける行動がはびこるようになってしまったから。
- ② 人の内心に立ち入らず自他を傷つけないのがやさしさだという認識が広がる中では、マナー違反など相手の不適切な行動に注意を与えても、相手が行動を改めるどころか、相手を傷つけたと解されて、相手から不当な反発を受けるにすぎないから。
- ③ 注意したら殴られることが広まった世の中では、自他を傷つけないのがやさしさであるからには、人を殴らせないよう相手を怒らせないことが重要であり、暴力の主である相手より暴力を振るわせる言葉を発した自分のほうが罪が重くなるから。
- ④ 今や携帯電話もペットも社会生活に欠かせないものであり、それに注意を与える人間のほうこそ、多様性を認めずやさしさを発揮できない人であるという考えが広まっていて、他者の指導を受ける雰囲気がなくなっているから。
- ⑤ 若者は、目上の者が自分のルールを押し付けてくることを不快に感じているため、学校や職場での教育が注意によって成り立っている以上、学校や職場に根本的な不快を抱えつつ通い続け、学習への興味や関心が感じられないままとなるから。

問5

文脈上、

に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式** 18。

- ① 自分の命が掛かる危険性を強調しているのである
- ② 尊さのなかにあるやさしさを重視するのである
- ③ やさしさのもつ過酷さを指摘しているのである
- ④ 無傷であることの「善さ」を説いているのである
- ⑤ 「新しさ」に宿る斬新さを主張しているのである

問6

「**C**」ここで、「やさしい」とはどういう意味なのか、辞書的な意味を確認しておきたい」とあるが、

ここにおける筆者の意図は何か。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式** 19。

- ① 「やさしい」という行為を太宰治がどう受け止めていたかについて、津島美知子の仮説が語義的に正しいかを検証しようとした。
- ② 自分の命が掛かってもお他者へ向ける太宰治の「やさしさ」を修正するため、「やさしい」の原義を調べようとした。
- ③ 非常に厳しい現代の「やさしさ社会」が、他人を注意する厳しさへと向かってきたメカニズムを解明しようとした。
- ④ 語源や古語までさかのぼることによって、「やさしい」という語が含む伝統的な価値観や考え方を把握しようとした。
- ⑤ 長い時間をかけて広まった、自他を傷つけない「やさしさ」という考え方がいかにうわべだけのものかを示そうとした。

**問
7**

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式** 20。

- ① 学校や職場の機能を回復させるには、相手を傷つけてはいけないという新種のやさしさの捉え方を排除しなければならない。
- ② 現代のやさしさは非常に面倒でつらいものであり、かつては太宰治も、そのやさしさに精神的に追い詰められていた。
- ③ やさしさの中に、相手を傷つけるのが怖いという動機が含まれているのは、昔も今も誰にでもよくあることである。
- ④ 「やさしい」には情が深いという意味があるため、相手を思うなら、真心をこめて語りかける行為を大事にしたいものである。
- ⑤ 相手を傷つけない配慮としてやさしさを捉える傾向が現代では広がるが、その配慮自体は古来日本に宿る考え方である。

三

次の文章は、井上靖の小説『しろばんば』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

食事を終ると、洪作と唐平はすぐ帰路に就いた。秋の日は暮れるのが早いので、湯ヶ島に帰り着くまでに日が暮れたらいけないという林太郎の配慮から、早々に追い立てられるようにして帰されたのであった。帰路は洪作と唐平は仲よく一緒に歩いた。洪作は同じ椎茸作りの家の血が流れているということで、唐平にも

X

を感じた。

夕方湯ヶ島に帰り着くと、その晩唐平は土蔵に泊った。親戚の者が土蔵に泊ったのは殆ど初めてと言つてよく、洪作は嬉しかった。洪作は唐平に対する意地の悪い厭な少年だという印象をその晩改めた。人みしりする口下手な少年であつたが、よく話してみると、洪作と気の合うところがあつた。

「おらあ、祖父ちゃんみたいに椎茸を作るか、父ちゃんみたいに先生になるか、まだ決めてないんだ。その二つのうちのどっちかをやることだけは決まっている」

唐平はおぬい婆さんの厭の聞えている闇の中で言つた。洪作はそんなことを聞くと、自分が何になるかまだ決っていないことが、何となく落ち着かない気持だった。早く決めないと遅くなるような気がした。

唐平の寝息が聞えてからも、洪作はまだ眼覚めていた。そして(注1)棚場の山の中で、祖父林太郎も今頃眠っているであろうかと思つた。深夜の棚場の死のような静けさが、洪作には今はつきりと自分の五体に感じられるような気持だった。洪作は自分が心から尊敬できる人物を自分の身近いところに発見したことで、やはりその晩は昂奮していた。

棚場へ行つてから四、五日して、洪作は学校で受持教師に呼び出された。そして(注2)田方郡の各学校から作文のうまいのを一つ選んで郡の方へ出すことになつたので、何か自分で自由に題を選んでそれを書いて提出するように言われた。

「女生徒の方では六年のあき子さんが書く。書く題材が一緒になるといけないから、二人で一応相談してから書きなさい。でき上がった上でいい方を出すことにする」

若い教師は言つた。洪作は選拔を受けたことも嬉しかったが、所長さんの家のあき子と一緒に書くということは、それだけで心の躍る悦びがあつた。その日一日、洪作は学校で落ち着かなかつた。教師に命じられたので、あき子とそのことを相談しなければならなかつたが、しかし、学校であき子と話でもしようものなら、多勢の生徒たちにはやし立てられることは決つていた。

従つて放課後にそうした機会を持たねばならなかつた。学校に居る時、洪作は休み時間に遠くからあき子を見守つていた。あき子も自分

と同じようなことを先生の口から伝えられた筈である。どのような気持ちでいるであろうか。A
あき子はいかなる変った表情も取らなかった。

学校を退けると、洪作は教科書を土蔵へ投げ込み、すぐ^(注3)御料局の所長さんの家へ出かけて行った。家の前でメンコをしていた公一が、「姉ちゃんはお宮さんの掃除に行ってる」

と言った。洪作は公一を連れて神社へ行こうと思ったが、公一は仲間を待っているの、神社へ行くのは厭だと言った。洪作は一人で村にただ一つある小さい神社へ出かけて行った。神社の境内には女生徒が十人ほど散らばっていた。

洪作はいつもなら女生徒ばかり居る場所など近寄って行くのは厭であったが、今日は教師から命じられた用事を持っていたので、たいして**b**気おくれしないで鳥居をくぐって行った。六年生のあき子は下級生たちを監督しているといった恰好で、社殿の横手に立っていた。洪作はあき子が自分の姿を見つけた筈だと思ったが、いっこうにそ知らぬ顔をして、他の女生徒と話をしているのが不満に思われた。洪作はあき子のところへ行くと、

「先生から聞いた？」

と言った。

「何を？」

あき子は初めて洪作の方へ顔を向けて言った。

「^(注4)綴方のこと」

洪作が言うと、

「ああ、あれ、聞いた。——何を書いてもいいんでしよう」

と言った。洪作はあき子の口から出る村の言葉とはまるで違った言葉づかいが眩しく感じられた。

「何を書く？」

洪作はまた訊いた。

「秘密よ。ずるいわ、洪ちゃって。——わたし、書いてしまうまで言わない」
そんなことをあき子は言った。

「先生が相談しろって」

「嘘！」

「嘘なものか。本当にそう言ったんだ」

「そんなこと言いっこないわ。洪ちゃって、嫌いよ、ずるいから」

洪作としては甚だ心外な言いがかりだと言わざるを得なかった。

「本当に先生から相談しろって言われたんだ」

洪作は相手を睨みつけながら言った。すると、あき子も瞬間烈しい顔をした。洪作はこれまであき子がこのような敵意をもった烈しい顔をするのを見たことはなかった。

「じゃ、洪ちゃは洪ちゃで、書くことを先生に話したらいい。わたしはわたしで先生に話すわ」

それからあき子は、洪作の方へきらりと光った眼を当て、

「そうでしょう。そんならいいでしょう」

と言った。

洪作は人から誤解されるということをあき子に依って初めて経験した。自分の気持や自分が考えていることを、どうしても相手に理解して貰えず、そればかりか自分が相手に対して悪意を抱いているようにすら受け取られることの、何とも言いようのない悲しさを味わった。

洪作は、翌日登校すると、受持の教師に、自分が書くこうと思っている綴方の題を報せた。

「あき子さんと二人で先生に題を言いつくすることにしました。『祖父と椎茸』こういう題で書きます」

「そうか、それでもいいが、何も匿し合うことはない。ばかだな」

教師は言った。洪作はこの場合も、教師に依って幾らか誤解されていることを感じた。

洪作は二晩ほど作文のために使った。この間唐平と二人で棚場へ祖父を訪ねて行った時のことを、そっくりそのまま書いた。自分がいかに祖父から大きい感銘を受けたか、そして孤独な生活の中で椎茸の研究に没頭している祖父にいかにかに大きい共感を覚えたか、そういったことを、綴方用紙十枚ほどに綴った。洪作がそれを学校へ出す日の朝、おぬい婆さんは、

「どれ、見せてごらん」

と言って、それを窓際で読んだ。読み終ると、

「石守のじいちゃんも、洪ちゃんにこんなによく書かれたらいつ死んでもよからう。倅^{しあわ}せなじいちゃだ」

と言った。綴方を教師の手もとに出してから三、四日して、洪作は校長の石守森之進に呼ばれた。洪作が校長室へは行って行くと、

「ここが違っている。直しておきなさい」

と、伯父の校長は言った。椎茸の栽培に関することを、糸^{くめ}さんが洪作と唐平に説明する箇所^{かしよ}であった。欄外に鉛筆で二、三の用語が訂正されてあった。

「棚場に行ってよかったらう」

伯父は、例によって、憤^{おこ}ったような表情と憤ったような口調で言った。洪作は伯父の校長が、自分が祖父を棚場に訪ねて行き、このような作文を書いたことを、結局は **Y** のであろうと思った。伯父のにこりもしない気難しい顔からは、その心の内側を覗^{のぞ}くことはできなかったが、洪作には何となくそのように感じられた。それから伯父が自分を棚場へ行かせたのは、こんどの学校から郡へ出す綴方にそのことを書くようにという含みがあったのかも知れないと思った。

洪作はあき子がいかなるものを書き、いつそれを教師の手もとに出したか、全く知らなかった。洪作はあき子と道で会っても、学校の運動場で顔を合せても、ひと言も喋^{しゃべ}らなかった。口などきいてやるものかという気持だった。あき子の方はあき子の方で、やはり同じような敵意を洪作に抱いているらしく、洪作の顔には決して視線を当てなかった。 **C** 全く洪作の存在には気付いていないといった風を装っていた。

十二月にはいつてから、洪作は教師に呼び出され、教員室へ行くと、

「綴方を出したが、最初に落ちた。町の学校の生徒とはまるで月とすっぽんだ。まだあき子の方を出した方がよかったかも知れん」

教師は言った。叱^{しか}られたのか厭味^{いやみ}を言われたのか判らなかった。洪作は堪^{たま}らなく不快だった。あき子の綴方と自分の綴方が比較され、自分の方が選ばれて郡の方へ出されたことも、またそれが最初に落ちてしまったことも、洪作はこの時初めて知ったのであった。

洪作は、この日、学校が退けると、教科書を土蔵の入口に投げ込んでおいて、すぐ一人で、若い衆宿(青年詰所)の横手から、墓地のある熊野山へ登って行った。洪作はこれまで一人で熊野山などへ登ったことはなかったが、この時は堪^{たま}らなく一人で、たれも居ないところへ行ってみたかった。 **D** こんどの綴方のことは、初めからすること為^なすこと志と違った感じだった。

(注) 1 棚場——林太郎が椎茸を栽培している山中の集落。

2 田方郡——静岡県田方郡。洪作が住んでいる村が属している郡。

3 御料局——国有林を管理する部局。

4 綴方——作文のこと。

問 1

22。 X

Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 解答番号は、マーク式 21。

X

21

① なつかしいもの

② わかりあえないもの

③ 親しいもの

④ 近寄りがたいもの

⑤ 心浮き立つもの

Y

22

① 無関心なままだいる

② ねたましく感じている

③ 心配してくれている

④ 不愉快な思いをしている

⑤ 悦んでくれている

問 2

波線部 a ～ c の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 解答番号は、マーク式 23。

「a 人みしり」

23

① よく知らない人とも親しくなろうとすること

② 見知った人に対して遠慮をすること

③ 誰に対しても遠慮なく振る舞うこと

④ 見慣れない人を恥ずかしがったりすること

⑤ 誰からもよく知られていること

「^b気おくれ」

24

- ① 心がひるむこと ② 引け目を感じる ③ 乗り気になること
④ 気分が落ち着かないこと ⑤ あれこれ思い悩むこと

「^c心外な」

25

- ① 期待を越えている ② 思いもよらない ③ 現実離れをしている
④ 思慮の浅い ⑤ 良心を欠いている

問 3

「A

一、二度、洪作はあき子と視線を合わせたが、あき子はいかなる変った表情も取らなかった」とあるが、ここでの「洪作」の心の動きの説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式** 26。

- ① あき子は六年生の中でも監督者的な立場にあるため、自分から男の子に声をかけることは決していないことに気づき、そうした気位の高い態度に近寄りがたいものを感じている。
- ② あき子が、自分と二人だけしか知らされていない事実を隠しておきたい、という思いを持っていることに気づき、不用意に視線を送った自分の行いが思慮の浅いものであったと恥じている。
- ③ 御料所の所長の娘でもあるあき子は、厳しくしつけられているため、本当は自分と話がしたいのだが、男の子と親しく話をすることができない不自由な立場に同情をしている。
- ④ あき子も自分と話をする機会を持たなければならぬため、視線が合った際、何らかの意を含んだ態度をとるものと期待していたが、そつけない態度をとられて、はぐらかされた気分である。
- ⑤ あき子から先に自分に話しかけてくるはずだと考えていたが、他の生徒にからかわれることを恐れて、何度視線を合わせても素知らぬ顔をしていることに不満を募らせている。

問 4

「B

洪作はこの場合も、教師に依って幾らか誤解されていることを感じた」とあるが、ここでの「洪作」の思いを**八〇字以内**

で説明しなさい。解答番号は、**記述式 4**。

問 5

「**C** 全く洪作の存在には気付いていないといった風を装っていた」とあるが、ここに描かれている「あき子」の様子からどのようなことがうかがえるか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式 27**。

- ① 神社でのやりとり以来、急によそよそしい態度をとるようになった洪作に対して、驚きや戸惑いを感じながらも憤りの気持ちを持っている。
- ② 自分の綴方が学校代表に選ばれたという思いを強く持ち、ずるい手を使おうとした洪作に対して不信感や敵対心を抱いている。
- ③ 洪作とは今まで通りの関係に戻りたいと願いつつも、競い合っている関係にあることから、素直な態度がとれずにいらだっている。
- ④ 洪作に対しては、この間ずっとそっけない態度をとり続けてきたため、今更その態度を改めることができずに困惑をしている。
- ⑤ 何度も自分の真意を伝えようとしたにもかかわらず、自分の非を認めて改めようとしないう洪作に対して、激しい怒りを感じている。

問 6

「**D** こんどの綴方のことは、初めからすること^なと志と違った感じだった」とあるが、ここでの「洪作」の心の動きはどのようなものか。その心境を説明した次の文の に**六〇字以内**で「すること^なと志と違った感じだった」の内容を記述して完成させなさい。解答番号は、**記述式 5**。

洪作は ことに、やるせなさを感じ、無性にひとりになりたかった。

問7

本文の表現上の特徴についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式** 28。

- ① 登場人物の会話を通じて物語が淡々と展開し、心情描写を極力排しつつ、第三者的な視点から物語全体が写生的に描かれている。
- ② 主人公については時系列にあわせてその内面の変化が語られ、他の登場人物については、客観的な心情描写が丁寧になされている。
- ③ 文語的な表現を用いることで、場面の切り替えを早くして、時間経過とともに変化する登場人物の人間関係をきわだたせている。
- ④ 自然や村の風景が物語の背景として美しく描かれ、それらが登場人物の心の動きに影響を与えることを情感豊かに描いている。
- ⑤ 会話文に描写的な表現を重ねることで、登場人物の内面の葛藤や成長、人間関係の微妙な変化などが丹念に描かれている。

四

漢字・語句について、次の問いに答えなさい。

問

A～Jの各傍線部について、A～Dは漢字の読みをひらがなで、E～Jはカタカナに相当する漢字を楷書で、それぞれ答えなさい。
なお、送り仮名が必要なときは、それも書くこと。解答番号は、**記述式 6 A～J**。

A 醜聞を種に恐喝する。

B ささいなことに拘泥する。

C 損失を補填する。

D 大仰にため息を吐く。

E 茶道の奥義をカントクする。

F 敵のコンタンを見抜く。

G 交通事故をボクメツする。

H 旧習をボクシュする。

I 人の話をサエギル。

J 多数派の意見にフワライドウする。

(問題 終わり)

（
余
白
）